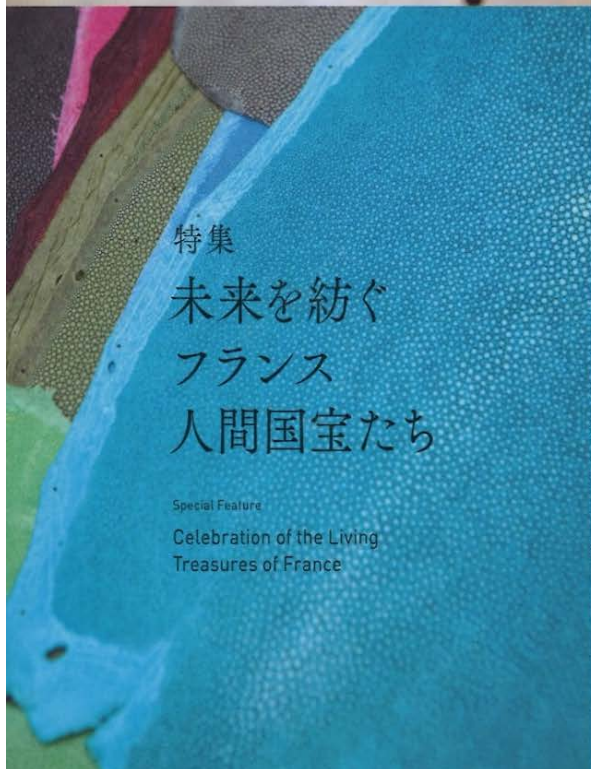


2017.7.18 SIGNATURE 8&9 号

SIGNATURE

The Magazine for Diners Club Card Members

シグネチャー
August &
September
2017
Number 604 **8&9**



特集
未来を紡ぐ
フランス
人間国宝たち

Special Feature
Celebration of the Living
Treasures of France



特集

未来を紡ぐ
フランス
人間国宝たち

28



第2特集	GINZA	変わる銀座、変わらぬ銀座	61
旅先でここに残った言葉	文・伊集院 静 写真・宮澤正明	ボローニャ	6
Signature Interview	スヴェトラナ・ザハロワ & ワディム・レービン	世界最高のプリマが舞う「愛の世界」	13
今月の一皿	なれにく せん	なれにくを凍らせて?	16
Column Signature	"Kabuki" a sense of beauty 文・川添史子	色と欲にまみれた破戒坊主が立ち回るブラックなお家騒動の隅田川物	19
	Art 文・橋本麻里	《裂》に宿る、凝らされた叙智と美意識	21
	Entertainment 文・奥田佳道	大マエストロ率いるルツェルン祝祭管弦楽団、11年ぶりの来日!	23
What's new ?	Fashion	過去のプリントを 鮮やかにリワーク	24
	Watch & Jewelry	月と星の語らい 永遠のフェミニティ	25
	Gourmet	夏を涼しくする羊羹 葉野和久傳「笹ぼたる」	26
	Beauty	パカンス気分へ誘う 大人の洗練シトラス	27
Japan Project		SAKE COMPETITION 2017 日本酒を、世界のスタンダードに	44
Gérard Margeon		ワインを謳う—ジェラル・マルジョンのエスプリ	48
HUBLOT		響き合う時	52
PARMIGIANI FLEURIER		永遠の価値を秘めたシンプルウォッチ	54
Mason Pearson		髪と頭皮をケアする究極のヘアブラシ	55
Kyoto Hotel Okura		京都ホテルオークラ 「粟田山荘」夕食付き特別宿泊プラン	56
AUDEMARS PIGUET		西日本初。ブランドのすべてを伝える旗艦店	57
Signature Information		シグネチャー インフォメーション	58
MONTBLANC		平安の物語が万年筆に	59
Diners Club Rugby Project		ラグビーには勝利だけではなく、敗者の美学が必要なんだ	70
Diners Club "Rakugo"		ダイナースクラブ落語 老舗料亭に吹いた江戸の風	72
Diners Club Artist Support Program		5周年スペシャルコンサート 多彩なハーモニーを愉しむ夕べ	74
Diners Club Travel Desk		旅のお供にダイナースクラブ ~旅行中にご利用いただける便利なサービス~	76
Diners Club France Restaurant Week 2017		今年も秋に開催決定! フランス料理の祭典 ダイナースクラブ フランス レストランウィーク 2017	78
Club Signature		「お客様のお声」への取り組み	98

Club House	お知らせ	77
	イベント	80
	キャンペーン	83
	トラベル	88
	チケットサービス	96
	インフォメーション	97

表紙写真 景山 郁

色彩豊かな羽根細工(右上)に、名画に描かれたような優美な傘(左上)。喜怒哀楽まで伝わるエンボス作品(右下)や、エルメス出身の作家が作るバッグ(左下)。世にも稀なる美しさで魅了するフランス人間国宝たちの名品が、この9月、華麗なる競演を繰り広げる。



アートディレクション・デザイン ナカムラグラフィック
DTP 株式会社Gruppe S
企画制作 株式会社トド・プレス
広告に関するお問い合わせは
株式会社マイク
電話03-5935-7600

特集

未来を紡ぐ

フランス

人間国宝たち

世界初となる

至高の美の祭典が来日

“人間国宝”という称号、実はフランスでも認定制度があることをご存じだろうか。伝統工芸を芸術の域にまで高めている作家に授与されるもので、ユネスコにも登録されている制度だ。

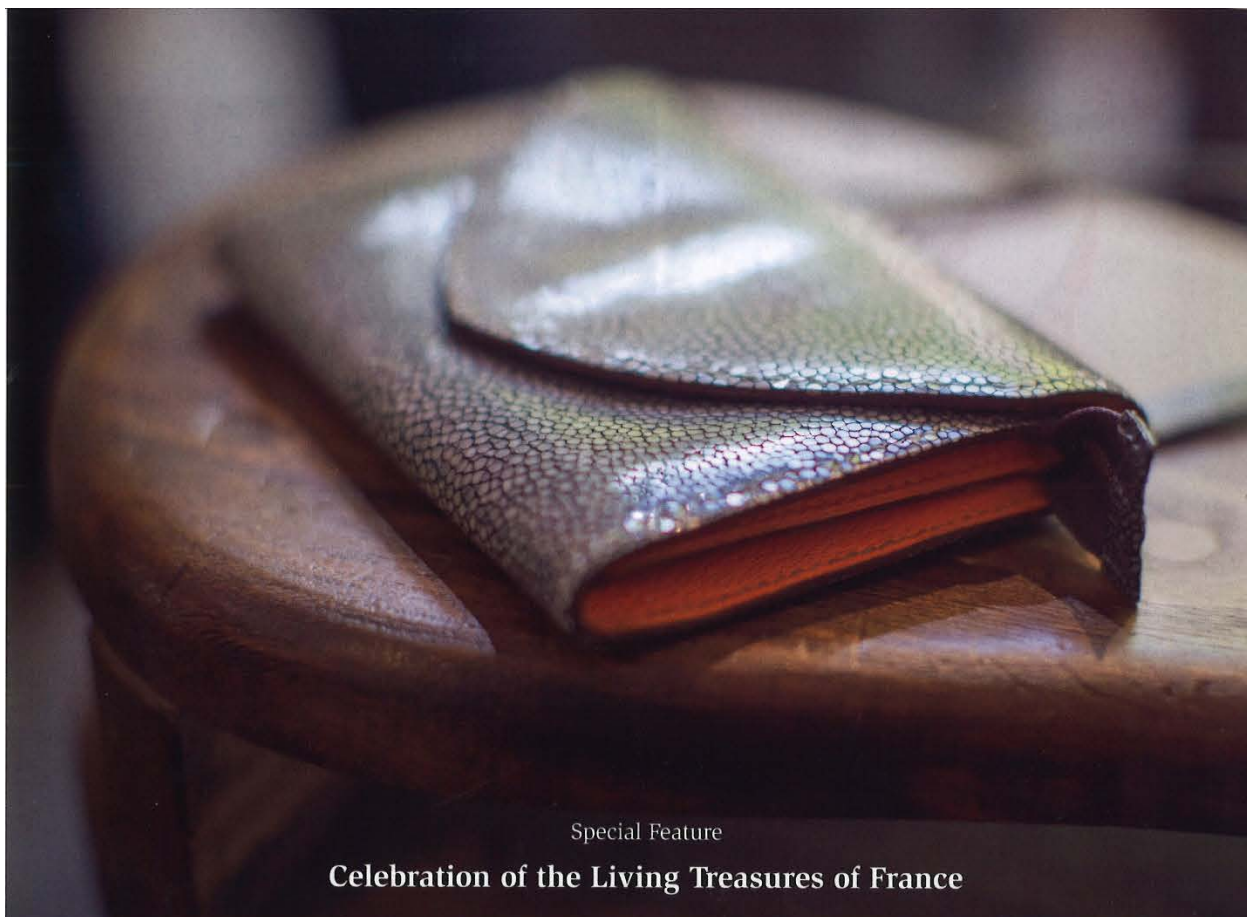
この秋、そのフランス伝統工芸の最高峰が創り出した作品が日本に集結する。

メートル・ダール（フランス人間国宝）

次世代へと美の系譜をつなぐ人々による類い稀なる祭典の開幕だ。

写真・景山 郁 文・須田えりか、小倉理加 取材協力 WONDER LAB, HEART & crafts

細やかな手刺繍が施された日傘。左ページ1枚のガルーシャ（エイの革）で作上げたハンドバッグと、パリの超一流ホテル内のスパのメニュー表。革職人とエンボス加工職人、それぞれの英知が凝縮された渾身の作品が、“神は細部に宿る”ことを実証している。



Special Feature

Celebration of the Living Treasures of France

Photographs by
Iku Kageyama

Text by
Erika Suda & Rica Ogura

Special Thanks To
WONDER LAB, HEART & crafts





2枚として同じものが存在しない羽毛を自在に操り、幻想的な世界を築き上げる羽根細工職人。命同様に素材を尊重し、繊細な美しさを最大限に引き出すことを使命としている。20世紀初頭はパリを中心に繁栄していた羽根細工業だが、現在では衰退が危惧されている職業のひとつ。



紙の表面に刻んだ凹凸と箔押し加工の金属的な輝きで、唯一無二の高級感を演出。多くの芸術家が仕事場を構えるパリ 12 区のヴィアデュック・デザールに位置する工房では、高級コスメティックブランドのパッケージ、ショーやパーティの招待状などの製作を行っている。

伝統技術に現代の息吹を注ぐ、 美の匠の人生に触れる展覧会

フランス人間国宝（メートル・ダール）制度の始まりは、1994年に遡る。日本の重要無形文化財保持者（通称「人間国宝」）にならって、フランス文化・通信省が制定したものだ。フランスにおける工芸の賞は、料理界でよく知られるMOF（国家最優秀職人賞）や、企業に授与されるEPV（文化遺産企業認定）があるが、メートル・ダールは最も権威ある称号とされている。2016年現在、認定者は124名を数える。

「その中の精鋭13名と、次期・人間国宝と期待されている2名の作家による作品200件余りを総覧できる展覧会を東京・上野の東京国立博物館で開催することになりました。75パーセントが、本展のために新たに創作される作品となります。この『フランス人間国宝展』をきっかけに、今後、日本とフランスの工芸分野での交流がより活発になることを目指しています」

そう教えてくれたのは、この世界初の試みとなる展覧会のキュレーションを行うエレヌ・ケルマシユテルさん。実際にどのような作家の作品が一堂に集うのか、美しい数々の写真とともに説明してくれた。色とりどりの羽根細工や、宮廷文化の時代が偲ばれる華麗な扇子、何世紀も前の肖像画に描かれているような優美な傘、息を呑むほどに壮麗なガラス細工など、まるで夢の世界を覗いているように幻想的だ。

「初めて彼らの作品を目にしたとき、瞑想しているような感動に包まれたことを覚えています。顧客のほとんどは世界の王族や貴族で、各国の公立美術館に所蔵されている作品も少なくありませんが、作家たちが謙虚で人間性も優れていることが印象的でした」

「日本での滞在が、私の新たな色彩感覚を目覚めさせました」

パリ南部の静かな住宅街の一角に、ネリー・ソニエ氏のアトリエはある。陽光が心地よく注ぎ込む作業台には、カラフルな羽根が所狭しと並ぶ。彼女の手元には、まさにこれから接合されようとしている羽根の束が左右対称に置かれていた。くしゃみ厳禁ですねとの愚問に、主は首を横に振って答えた。

「かまいません。バラバラになってしまったら、また新しいアレンジメントを考えればいいのです。この無限の可能性が、羽根の魅力のひとつです」

風を切って飛ぶための翼には通気性の少ないもの、下腹部には水をはじきやすいものといった具合に、一羽の鳥から得られる羽根でも、生えている部位によって形、厚さ、質が異なり多彩だ。それらの採取、洗浄、着色などすべての工程を自ら行い、エスプリを素材に代弁させて作品を仕上げる。

2015年、京都の『ヴィラ九条山』に4か月滞在し、物質に魂が宿るという考え方や色使い



羽根細工作家
ネリー・ソニエ

羽根の美しさに魅了され、14歳でこの世界を志す。2008年に人間国宝に選ばれ、09年に「手の賢さに捧げるリリアンヌ・ベタンクール賞」受賞、2012年にフランス文学芸術勲章受章。羽根細工業の再興のために尽力。

に感銘し、それを作品にも反映しているという。「既成概念を打ち破り、人の心に新鮮な驚きをもたらすことにやりがいを感じています」

ダチョウの羽根で仕立てたクチュールメゾンのドレスや、クジャクとキジの羽毛を敷き詰めた一流ジュエリーの腕時計の盤面など、ソニエ氏の作品はいずれも詩的で幻想的。それが本当に鳥の羽根でできているのかと思わず凝視してしまうほど、美しくも不思議だ。

ただし、羽根細工業界自体は鳴りを潜めてしまっており、女性界の社会進出により、機能的で簡素な装いが好まれるようになって需要が減少したのが原因だという。そんな羽根細工の再興隆こそが、ソニエ氏のライフワークだ。彼女自身がテクニクを学んだ芸術高校で約20年間教鞭を執った後、今ではこのアトリエで後継者の育成に努めている。

「技術の継承に、多くの時間と情熱を注ぎ込んでいます。私のたった1回きりの人生だけでは、羽根の魅力を伝えきることはできませんから」



素材そのものがインスピレーションの源だと語るソニエ氏は、デザイナーや映画の衣装方からのオーダーに応える一方で、自らの作品の制作にも熱を入れる。鳥の羽根だけをを用いて作り上げたドラゴンは、アシンメトリーなボレロとなって女性の肩を覆う。緻密なデザインに、トロンプルイユのような遊び心が盛り込まれた逸品。



「仕事と趣味の境目がない」と語るのは、独学で人間国宝になったという異例の経歴の持ち主。膨大なアンティーク傘とそれに関する資料のコレクターでもある彼は、まさに洋傘の生き字引だ。芸術性が高い傘は、映画『シンデレラ』、『イヴ・サンローラン』でも用いられた。



左2点：バッグや財布だけでなく、革張りの宝飾箱やオブジェなど、顧客のあらゆるわがままを叶える百戦錬磨の革細工職人。右2点：原材料の確保の困難という壁に直面しながらも、趣向を凝らして創意に満ちた作品を生み出し続ける鼈甲細工職人。

information

「フランス人間国宝展」

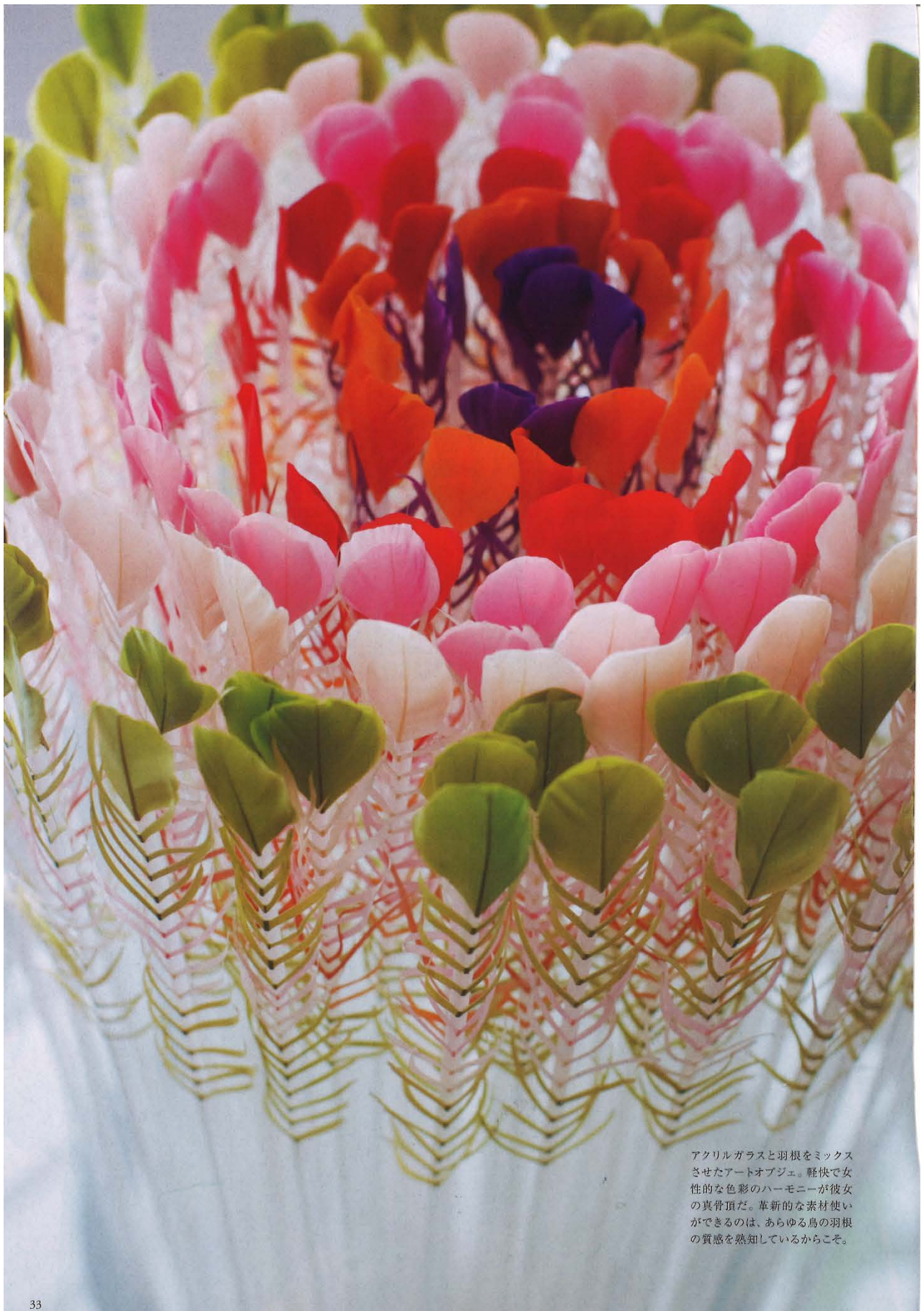
会場：東京国立博物館 表慶館
東京都台東区上野公園13-9
会期：2017年9月12日～11月26日
電話：03-5777-8600（ハローダイヤル）
開館時間：9:30～17:00
※金曜・土曜、11月2日は21時まで
※9月17日・18日・24日は18時まで
※9月22日・23日は22時まで
（入館は閉館30分前まで）
休館日：毎週月曜日
9月18日、10月9日開館
9月19日休館
<http://www.fr-treasures.jp/>

もうひとつ驚かされるのは、作家たちが若いこと。日本の人間国宝は、長く研鑽を重ねてきた老齢の大家が多いが、メートル・ダールは違う。次世代へフランスの文化遺産を継承する情熱が重要だからこそ、脂が乗っている作家に白羽の矢が立てられるのだろう。「メートル・ダールを認定する基準は3つ。まずは、最低15年間、現在の職に従事していること。また、イノベーションの精神を持ち、伝統技術を革新する貢献を行っていること。そして、認定後には弟子に惜しみなく自身の技術を継承する使命を負います」今回の展覧会でも、未来を意識し、15名を最終的に決定したとケルマシュテールさん。「独特の世界観を持ち、感動をつくり出す人であり、技術を自分のためではなく、次世代へ伝えるべき使命だと考え、真摯に物作りを行っている人物を見極めました。この会は、最も美しいフランスの工芸作品を披露するだけにとどまらず、作家自身の人生の美学に触れることができるものだと思います」と語る。そのために、日仏の職人による対談をはじめ、子供向けのワークショップなども企画されている。「人間国宝のルーツである日本の人々にこそ、現代のフランスで躍動する伝統工芸を知ってもらい、感動を味わってほしいと思っています。これは、フランスから日本への特別な思いを込めた贈り物なのです」



キュレーター
エレーヌ・ケルマシュテール
Hélène Kelmacher

カルティエ現代美術財団学芸員、在日フランス大使館の文化担当官を経て、現・アルゼンチンのフランス大使館に在籍。フランスおよび日本で数多くのフランス文化の展覧会を手がける。イッセイミヤケ氏とのデザイン展は記憶に新しい。



アクリルガラスと羽根をミックスさせたアートオブジェ。軽快で女性的な色彩のハーモニーが彼女の真骨頂だ。革新的な素材使いができるのは、あらゆる鳥の羽根の質感を熟知しているからこそ。



「洋傘に関する知識もテクニックも、すべて独学で習得しました」

「人間国宝だなんて、実は少々おこがましいのです。私は好きなことを、やりたいようにやっただけですから」

人間国宝に選出されるためにはいくつかの条件があり、その工芸に15年以上プロとして従事しているというのも、そのうちのひとつ。ただし、ウルトー氏の場合、厳密に言うと、この条件を満たしていないという。プロとしての経験年数が不足しているにもかかわらず人間国宝であると認められた事実、彼が唯一無二で、いかに貴重な存在であるかを物語っている。なにしろ19世紀の傘を当時の技術を用いて完璧に修復できるのも、各時代の傘の流行の変移を詳細に把握しているのも、彼をおいて他にいないのだ。1930年代にはフランス国内で約10万人いたという傘職人が激減してしまった理由には、傘に対するメンタリティの変化が挙げられる。ウルトー氏はそのことについて嘆いていた。「私の祖母や母の時代は、傘は壊れると修理をして、世代を超えて長く愛用するものでした。



作家 ミシェル・ウルトー

コルセットなどの年代物衣装の製作の仕事に携わったから、趣味で請け負っていた傘の修復や製作が高く評価され、傘職人として独立することに。2008年にパリのヴィアデュック・デザールに工房を開設。2013年人間国宝に。



それが今では、まるで使い捨て品のように扱われています。多くの人は雨さえしのぐことができればいいと考え、大量生産される劣悪な傘で満足するようになってしまいました」

ウルトー氏が製作する傘は、全く別の代物。傘が開いたときに美しく対称の曲線を描くように、骨組みのメタルを一本ずつペンチで均一に曲げ、強風でひっくり返らないように布を適度な強度で張り、細かな部品を付けていねいに仕上げていく。布を縫い合わせるためにミシンを使う以外は、すべて手作業だ。使用する素材は、骨組み部分のメタル、取っ手部分の木、防水加工を施した布など多岐にわたり、製作の工程も複雑だが、ウルトー氏はひとつひとつの作業をいっくしむかのように楽しんでいる。

「私のような根っからの自由人に、人間国宝の大役が務められるかと不安もありましたが、これを機に、傘職人の仕事にスポットライトが当たり、人々の傘に対する考え方が変わればいい」と思い決断をしました」

カイユボットやルノワールの絵画に出てくるような、エレガントな傘がずらりと並ぶ。温故知新の精神で、アンティークのデザインからインスピレーションを得て新しい傘を製作することもしばしば。独学のウルトー氏にとって、古いファッション誌や通販カタログは重要な情報源。舞台・映画関係者からの依頼も多い。



「経験で培った技術と優れた素材が出合った時、最高の作品が生まれます」

よい素材のおかげで技術がさらに磨かれ、より革新的な表現が可能になったが、ノグ氏の製作意欲は衰えることがない。

「できることをしているのでは能がありません。失敗を恐れず新しい技術に挑戦し、昨日

「通常の紙は、型を付けても平面に戻ろうとする作用が働きますが、竹尾のパチカは、凹凸をきつちりと記憶し耐久性もあるので、加工の跡が美しいままキープされます。柔軟性もあるので、よほどの加圧でもなにか破けることはありません。さらにクリアな印象のある紙質なので印刷が映えます。竹尾の洋紙に出合って、製作の可能性が広がりました」

「エ ンボス加工職人は、紙の上に三次元を構築する魔術師だ。エンボス加工とは、凹版と凸版で用紙に圧をかけ、立体を施すという表現技術。紙上のわずかな凹凸で光と影を操り、さらにメタリックの箔押し印刷で、エレガントかつ繊細な輝きを加える。精巧さの実現に欠かせないのは、日本の洋紙だ。」



エンボス加工作家
ロラン・ノグ

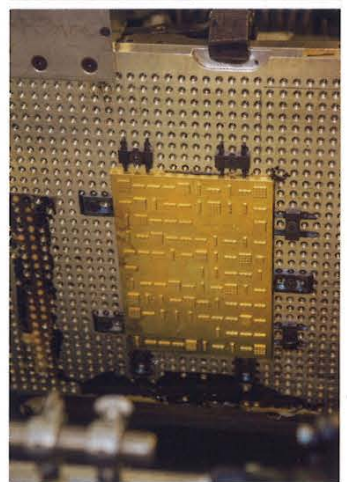
倒産した父親の印刷所を再建するため、1994年に自身のアトリエを設立。2011年に人間国宝に選ばれ、15年には「手の賢さに捧げるリリアヌ・ベタンクール賞」を受賞。自らを飽くなき探究者と称し、日々挑戦を続けている。

「工房同士が切磋琢磨していかなければ、業界全体が盛り上がりません」

大企業や有名メゾンへの仕事と同様に、ノグ氏が力を入れているのが点字本の製作だ。視覚障がい者のために、挿絵は凹凸だけで描かれる。登場人物の表情も緻密に刻まれ、指先で触れると喜怒哀楽さえも読み取れるほど。優れたエンボス加工技術なくしては実現し得ない秀作には、製作者の温かい気持ちが込められている。

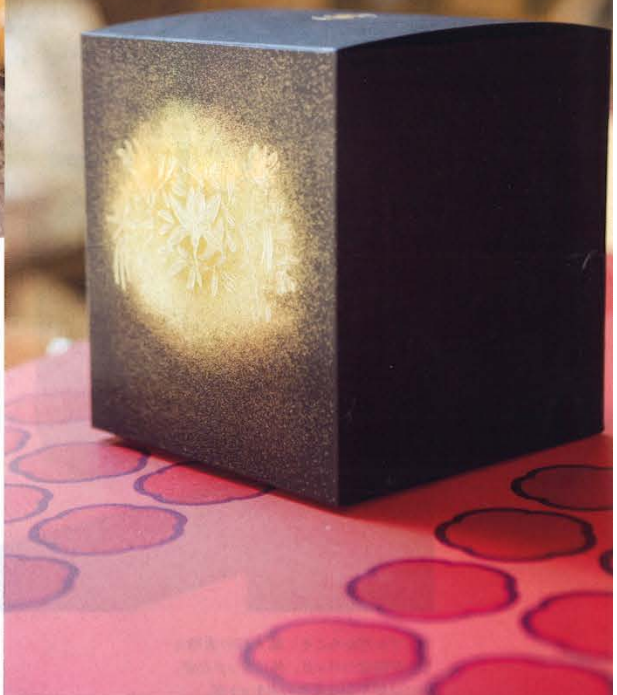
「ノグ氏の工房だけが保有する高い印刷技術も多いが、彼の頭の中には、奥義の門外不出などといった吝嗇な考え方は存在しない。」

「凹版と凸版の間に、人の手で1枚ずつ紙をセッティングして圧力を加え、平面上に細かな模様を刻み込む。メタリックの箔押しと併せれば、より格調高く表情豊かな仕上がりになる。卓越した技術で、紙という素材のポテンシャルを最大限に引き出し、手にした人の心が躍るような招待状やギフトボックスの製作を行っている。」





タチエールメゾンが販売するキャンドルのパッケージ。プラスチックよりもエコロジーな紙を好むデザイナーも多い。スピードよりもクオリティが優先され、構想から8年かけて完成に至ることも。



ノグ氏の作品に 欠かせない、 日本生まれの洋紙 竹尾の“パチカ”

「“パチカ”とは、パーチメント（透過）+化を組み合わせた言葉です。加熱型押しすると文字が透過する紙で、木材パルプと特殊な原料を混合して作られます。様々な洋紙を提案する中から、ノグさんがパチカの新たな可能性を見出し、作品に使われるようになりました」

そう教えてくれたのは、竹尾の代表取締役社長・竹尾潤さん。1899年から続く老舗である紙の専門商社、竹尾は、もともと海外から優れた洋紙を輸入し、日本へ紹介・販売してきた。2005年ごろから、日本の優れた紙を欧州に輸出し始め、パリに拠点も造る。エンボスに適した紙の扱いでは、竹尾はすでに第一人者だった。そのため、ノグ氏との縁ができ、現在では、竹尾なくしては自分の作品は完成しないと言わしめるような関係を築くようになった。

「私たちはペーパープロデューサーとして“感性素材”を扱っています。その素材を、“心に響くものづくり”を行っているクリエイターの方に指名していただけるのは非常に光栄なことだと思います」

フランス人間国宝の稀なる美しい作品の陰に、日本の素材ありだ。



点字本の挿絵に用いられる版は、精密機械によって彫られたもの。熟練工の手仕事と比較しても遜色がない仕上がりで、天使の髪質や表情、翼の躍動感までも細かく表現することが可能に。

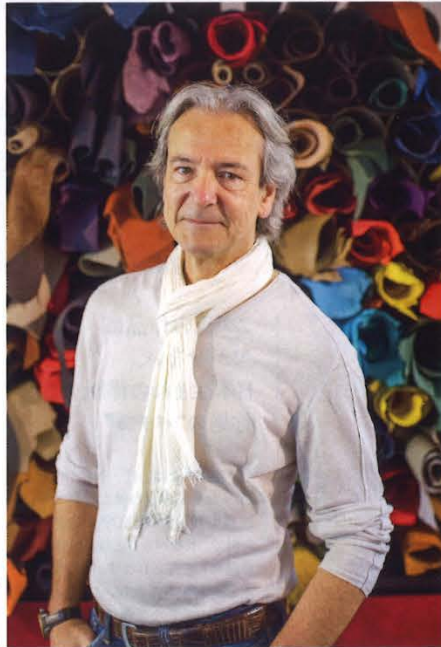


職人の手によってひとつひとつ彫刻された版。緻密さと美しさに、思わず息を呑む。ノグ氏の工房では、テクノロジーの導入にも積極的だが、人の手が生み出す芸術性が最重要視されている。

Maroquinier Designer
Serge Amoroso



シンプルだからこそ、職人技の素晴らしいところが際立つバッグ。外はシックだが、内には鮮やかな黄色のポケットが。



革細作家
セルジュ・アモルソ

家具職人の父の影響で、手に職をつけることを志し、革細工職人に。エルメスでの7年の経験の後に独立。牛、羊、クロコダイル、エイなどの様々な革を自在に扱う、卓越した技術の保有者。2010年に人間国宝に選出。

「的確な所作で、素材に新しい命を吹き込む。それが私の仕事です」

折

しも「フランス人間国宝展」に出品するためのバッグの製作が行われている最中だった。同じデザインのパックを、異なる素材を用いて9つ作る計画だという。すべて手作業なので、2つとして同じものは存在しないはずだが、アモルソ氏の手にかかれば、素材や色が異なる点を除いては、限りなく同一に近いバッグが仕上がるはずだ。

「これ見よがしの高級感や、製作者の苦労がにじみ出ているような作品には興味がありません。無駄がなく、ピュアな趣に仕上げるのが私流です」
寸分の狂いもないステッチ、端正なフォルム、遊び心のある色使いが、アモルソ氏の作品に共通するプロパティ。熟練工にふさわしいハイレベルな技の確立には、高級メゾンでの経験が役に立っているという。

「エルメス本店の上階にあるアトリエで過ごした7年間は、とても有意義でした。ただし時が経つにつれ、新しいことに挑戦したいという欲望が膨れ上がり、独立を決意しました」

現在は3人のアシスタントとともに、世界各国のセレブリティや王族などからの依頼に応えている。生産できる革製品の数は、年間で約100個。一点に、丸2年の歳月をかけることも。「お客様に優越感を味わっていただくためにも稀少性は不可欠です。私自身も、すべてのクリエーションをコントロールしておきたいので、100というのは理にかなう個数です。今後増やす予定はありません」

20歳の時に初めて来日して以来の大的日本通で、合気道のマスターでもあるアモルソ氏。精神と体の動きをリンクさせる点や、的確な一撃を下さなければならないという点で、合気道と革の扱いには共通点があるそう。右下は、折り紙の原理を応用した小銭入れ。ボタンやファスナーを利用することなく、革の折り目だけで開閉するトリックが利いた作品。



「鼈甲は黄金。限られた貴重な資源だからこそ、巧妙に扱わなければなりません」



琥珀色の光沢を放つ鼈甲の眼鏡は、柄が映えるように配感され、素材のロスがないようにデザインされている。



ボネ クリスティアン・ 鼈甲細工作家

ウミガメの甲羅から鼈甲を採取する技術を有する数少ない職人。2000年に人間国宝に選ばれる。祖父の代から続いている眼鏡職人としても名高く、パリと地方に構える2軒の工房で、3人の息子たちとともに活躍。

イヴ・サンローラン、ジャッキー・ケネディ、ジャック・シラクなど、ボネ氏の鼈甲眼鏡の愛用者は枚挙にいとまがない。一流を知る各界の人物から選ばれる理由は、そのデザイン性ももちろんだが、やはりかけ心地の良さだろう。熱を加えると柔軟性が出るといふ特質を利用し、鼈甲を火にかけ、鼻の高さや耳の形にフィットするようにカーブを微妙に調整。1ミリどころか、0.1ミリの妥協も許さないというボネ氏が手掛けた作品を試したら、もう別の眼鏡はかけられなくなるとの呼び声も高い。

「父も鼈甲眼鏡の作り手でしたが、仕入れた鼈甲を加工するのが仕事でした。私はそれだけでは物足りないと感じ、ウミガメの甲羅から鼈甲を採取する技術を習得しました。鼈甲職人の中でも、甲羅の扱いに長けた人は珍しいです」

鼈甲は甲羅を重ね合わせて厚みを出す、自在に甲羅を操ることによって、好みの色合いや模様の鼈甲を作り出すことが可能になる。

ただし、鼈甲のもともとなる甲羅を持つウミガメは全種が絶滅危惧種に指定され、ワシントン条約によって、国際間のトレードが禁止されて久しい。そのため、鼈甲職人は決定的な原材料不足に悩まされることになった。

「今日、私が鼈甲細工職人として存在しているのは、フランソワ・ミッテランのおかげです。彼の権限によって、規制前に輸入してあった甲羅のストックの使用許可が下りたのです。もちろん彼も私の鼈甲眼鏡の愛用者でした」

黒色と比較すると、オレンジや琥珀色の鼈甲は希少価値が高く、さらに斑が入っていない透明感のある部分はより貴重とされる。軽量でアレルギーフリーなのも鼈甲の魅力だ。右写真内の一番左の鼈甲のサングラスは、オードリー・ヘップバーンが愛用したモデル。顧客リストには大統領、女優、作家など、そうそうたる名前が並ぶ。



対談

細尾12代目 文化財保存修復家
細尾真孝 × ヴィオレヌ・ブレーズ

京都・ヴィラ九条山

日本とフランスが誇る

伝統工芸の未来をつなぐプラットホーム

日仏の伝統工芸における、新たな関係性を築く第一歩となる「フランス人間国宝展」。

伝統産業の集積地・京都には、その一助となる文化施設『ヴィラ九条山』がある。

写真 福森クニヒロ

細尾 「ヴィラ九条山」の話は、知人から聞き、一度訪ねてみたい場所でした。

ブレーズ この施設はフランス政府公式機関のフランス文化センター、アンステイチュ・フランス日本のひとつで、アジアで唯一となるフランスのアーティスト・イン・レジデンスなんです。

細尾 どんな方が利用できるのですか？
ブレーズ 現代美術からダンス、人文社会科学まで、あらゆる分野のフランスのクリエイターが対象です。自分のプロジェクトを応募して認められれば、2〜6か月の滞在が認められます。メゾネットタイプのスタジオの一室を自室として、研究・居住ができ、滞在中は滞在費も支給されるので、家族連れの人もあります。

細尾 ブレーズさんは、テキスタイルの文化財修復家と伺いましたが、アーティスト以外の方も対象なのでしょうか。

ブレーズ 私のプロジェクトは、印金の技術を現代に還元させることです。2014年に、ベタンクールシュエーラー財団の支援のもと、『ヴィラ九条山』がリニューアルをした際、工芸の分野が加わったため、応募できたのです。

細尾 印金といえば、薄手の絹地に文様を彫った型紙を当て、漆や膠を接着剤にして金箔を貼り付け、文様を布に写す技法だと思えますが、具体的にどのような研究をされているかを教えてください。
ブレーズ 現在、印金は世界中で誰もその技法を再現できる人がいません。これ

だけ美しいものを、自分の手で現代に甦らせることが私の課題です。文様を定着させるためには接着剤が鍵となるため、今は膠とデンプン糊などのレシピを試行錯誤中。型も自分で起こします。実際に印金に触れたことがある方にお話を聞き、多くの可能性を模索しています。

細尾 印金は、もともと装束に利用されていたものが、残念ながら廃れてしまったものですね。私の工房がある西陣には今でも引箔と言って、和紙に金や銀の箔をのせて細く切り、糸としてテキスタイルに織り込むという技法が残っています。

細尾さんは、海外用に新たな技法で表現した西陣のサンプルを取めた桐箱をお土産に持参。興味深く一枚一枚、見入っているブレーズさん。



Masataka Hosoo

元祿年間創業、西陣織の老舗・細尾12代目。大学卒業後、音楽活動を経て、大手ジュエリーメーカーに入社。退社後フィレンツェに留学し、2008年に細尾に入社。翌年より新規事業を担当し、革新的なファブリックで世界を魅了している。2012年10月より、京都の伝統工芸を担う6人の後継者ユニット「GO ON」始動。

ブレーズ ヨーロッパでは、織物に金箔を押すものを見たことがありません。印金は中国の南宋時代に一番盛んで、明時代に絶滅したと思われます。日本には名物裂として残っているようですね。
細尾 とくに、引箔は和紙がなくてはいけません。技法なので、日本にしかないものだと思います。また、ジュエリーを着ける文化がなかった日本だからこそ、身分を差別化する目的でテキスタイルに宝飾品の要素を持たせる必要があり、発展したのかもしれないですね。茶道と同じで、平安中期に日本らしさの形を追求する流れから、テキスタイルの技法も日本独自のものになっていったのかもしれない。ところで、ブレーズさんが印金に出合ったのは、どんなきっかけだったのですか？
ブレーズ 東京の会社で研修中に、練習をしているときに知りました。小さな生地を断片を裏張りする作業でしたが、今では誰も知らない技法が使われていると聞き、その神秘性に惹かれました。調べしていくうちに、この技法を自分の手で復元し、様々な工芸作家に利用してもらい



ベタンクールシュエーラー財団代表
オリヴィエ・ブロ

フランスの 手仕事を支える ベタンクール シュエーラー財団

「才能ある者に翼を」の旗印のもと、化粧品会社ロレアルの創業者の一人娘、リリアンス・ベタンクール氏（下写真）が財団を立ち上げたのは、1987年のこと。以来、私財と情熱を惜しみなく投じ、職人、研究者などの援助に努めている。『ヴィラ九条山』のサポートに続き、メセナとして「フランス人間国宝展」も支える。職人を擁護する意義を、代表のプロ氏が語ってくれた。

「優れた職人はフランス文化を国内外に広めるアクターであり、国の宝です。しかし、才能に恵まれながらも、日の目を見ない職人が少なからずいるのも事実。経済的・精神的支援は、才能の灯を消さぬため。また超一流の職人に贈られる『手の賢さに捧げるリリアンス・ベタンクール賞』も、さらなる高みを目指してほしいとの願いを込めた支援の一環です。デジタル化が進み、スピードと営利性が求められる現代社会ですが、今回の展覧会を通じて、日本の皆様と一緒に、伝統工芸の尊さを再認識できれば幸いです」



Violaine Blaise

染織品（テキスタイル）を専門とする文化財修復家。フランス国立文化遺産学院を卒業。ギメ美術館やガリエラ宮パリ市立モード美術館などで仕事をする。日本に興味を持ったのは、パリで日本の型紙展で目にした文楽。人形のコスチュームに惹かれたそう。その後、日本でも研修を数回行い、今回の『ヴィラ九条山』滞在へ。

取り組みとはどのようなものですか。
細尾 西陣を着物や帯としてではなく、素材として海外を中心に発信しています。帯の技術を使って、幅の広い織物が織れる機械を開発したことで、フランスではデイオールなどの高級ブティックの壁紙として用いられるようになっていきます。ブレイズ それはおもしろいですね。
細尾 もともと、現代の西陣は日本とフランスのハーフなんです。明治時代、西陣は最大顧客であった京都の貴族たちが東京に移ったことで、存続の危機を迎えました。そのとき、3人の若者が決死の

覚悟でリヨンに向けて航海に出て、自動で織れるジャカード機を手に入れたのです。そのため、一日に織れる長さが格段に進歩し、庶民にも手を出せる西陣が誕生した歴史があります。
ブレイズ リヨンが絹の街になったのは日本のおかげだと聞いています。17世紀に日本の蚕を輸入したことで、急激に発展したそうです。お互い行き来があり、それぞれが発展したのですね。
細尾 家電メーカーも、伝統工芸の歴史を考える時代に来ています。今年のミラノサローネでは、パナソニックとのコラボレーションで、新しい西陣の形として、金箔を使って通電する布を織り、布自体がスピーカーになるという作品を出品しました。伝統産業がクリエイティブになる機会がこれからますます増えていくように思います。我々も、一緒に新たな工芸の形を表現できれば素晴らしいですね。
ブレイズ 優れた技術と独特のデザインが組み合わさると未来になるのですね。
細尾 日本とリヨンの間を布文化が行き来した文化、我々が復活させましょう。

たいと思うようになったのです。
細尾 日本には残っていても忘れられていく技法を、海外の方が復元されようとしていることから、自分たちの身近にある素晴らしいものに気づかされました。現在は、過去のリサーチを未来へ受け継いでいくことの大切さを痛感し、日本各地のテキスタイルのルーツを訪ねています。また、昨年からMIT（マサチューセッツ工科大学）の特別研究員に就任し

たことから、サイエンスの最先端と美の組み合わせを研究しているのですが、残すべき芸術は国を超えて、人類の遺産として取り組むべきだと考えるようになりました。次の50年、100年も続けられるものを時代に合わせて、絶やさず受け継いでいく必要があると思います。
ブレイズ 伝統工芸は、日常から高級品になりましたが、技術が守られるためには大切なことですね。西陣織での新しい



金箔や銀箔を織り込んだ上で、新しい技法を加えた西陣の数々。伝統と最先端技術の融合が作る美を前に、ため息を漏らすブレイズさん。